

コミュニティの再生と NGO/NPO の役割

—人々の協働を引き出すファシリテーターとして—

評議員・長畑誠 (あいあいネット専務理事、明治大学大学院教員)

「自分たちのこと」を 自分たちでやらなくなった暮らし

子どもの頃から読書好きだったが、今でも通勤電車の中や出張中の空港待合室で手にするのは、(携帯電話ではなくて) 文庫本である。それも最近は傾向が決まっています、体調十分で元気な時は現代を舞台にした警察小説を楽しむが、ちょっと疲れ気味で浮き世を離れたい時は、何と言っても時代小説だ。それも江戸時代を舞台にした、庶民の生活が見えてくるものが多い。この分野では池波正太郎が第一人者と思うが(最近だと佐伯泰英か?)、鬼平犯科帳や剣客商売のシリーズは確か昔(1990年代)、シャプラニールのダッカ事務所兼ゲストハウスの本棚にも全巻が揃っていて、出張中に夜な夜なページをめくっていたことを覚えている。江戸時代の人々の暮らしやそこに起こるさまざまな人間ドラマが、なぜかバングラデシュの(少なくとも当時は)日本と違い全てが予定通りに行かない悲喜こもごもの毎日にマッチして、気持ちの中にスーッと入っていった。それ以来、池波正太郎に限らず、疲れた時には江戸の庶民の暮らしを描いた小説を手にとるのが普通になっている。

なぜ江戸時代に惹かれるのだろうか。時代小説を読んでいる時には、心地よいというか、安心感のようなものを感じる。それは、関わっている NPO (一般社団法人あいあいネット) の活動でちょくちょく訪れるインドネシアの村に居る時に感じるものと、どこか通じている。何となく懐かしく、心が落ち着いて、暖かくなるような感じ。これはインドネシアだけでなく、先日ベトナム中部の農村を訪ねた時にも感じた。いったい何なのだろうか。

時代小説ではないが、江戸時代のことを書いた「大江戸ボランティア事情」という本がある(石川英輔・田中優子著、講談社文庫)。「大江戸〇〇事情」というタイトルで複数あるシリーズの一冊だが、この本には江戸時代、(もちろん「ボランティア」という言葉なんか無かったのだが) 庶民は普通に「ボランティア」をしていた、ということが多くの実例をもとに書かれている。たとえば江戸末期には多くの町人が読み書きできていたことはよく知られているが、当時もちろん公立の小学校など無く、人々は「手習いの師匠さん(寺子屋)」で読み書きを学んでいた。そして寺子屋の先生は、教えることで報酬を得て生活している人は大変少なく、ほ

とんどが「ボランティア」だったという。また、江戸中期(八代将軍吉宗の時代)に創設された町火消し制度で火消しを担っていたのはとび職の人たちだが、彼らが貰えるひと月の(火消しとしての)給金は当時の大工の1日の手間賃と同じだった。つまり今で言うなら消防士として、燃えさかる火事の中で建物に昇り、家を壊して延焼を防ぐという大変危険な仕事をする人たちが、ほとんどボランティアであったという。さらに落語にもよく出てくる、長屋の管理人である「大家さん」というのは、当時、町内のもめ事一切の仲裁や裁判の付き添い、防犯防火活動、幕府への住民登録の届け出や幕府からのお触れのお伝達等、さまざまな公的な仕事も行っていたのだが、幕府からは一銭ももらっていなかった、等々。つまりは、江戸時代の行政(幕府)は庶民の暮らしに役立つ「行政サービス」などほとんど行わず、人々はみな、自分たちが暮らしていくために必要なことは、自分たちでやっていた、ということがこの本には数多く紹介されている。

人々が「ボランティア」を普通にしていた時代。それは決して江戸市中だけに限らず、農村においても同じだったと思う。用水路の掘削もその運用や管理も、そこに住む農民たちが共同して行っていた。田植えや稲刈りの際はお互いに労働力を融通しあう「結」があった。また生活に欠かせない薪や炭、家畜の餌や屋根の材料となる草木は村の「入会地」である森や山から調達しており、そこは村人が共同で管理していた。そして結婚式でも葬式でも、あるいは町内のお祭りでも、みんな共同で行ってきた。このように日常の暮らしから生産活動、そしてさまざまな文化的行事に至るまで、人々が互いに協力しあうことで社会が成り立っていた、というのが有史以来、長年ずっと続いてきたコミュニティのあり方だったのではないだろうか。

こうした暮らし方は日本のみならず世界中で共通していたと思うが、近年どこでも急激で大きな変化にさらされている。それは日本の場合、特に戦後の高度経済成長以降に顕著であった。人々は経済的な向上を第一の目的として効率的に働くようになり(「時は金なり」)、面倒なことは全てお上(行政)に任せてしまえばいい、という考えが広がっていく。私たちは便利で快適な生活を求め、そのために必要な現金収入のために忙しく働く。一方、行政は人々に必要なさまざまなサービスを担う存在となり、「公的なこと」はすべて行政が行うのが普通になっていく。さらにそうした変

化の背景には科学技術の発達があり、便利で快適な生活を実現するためには、専門的な科学技術の助けを借りていく必要がでてくる。そこから難しいことは「専門家」に頼ればいい、という考え方が定着してくる。面倒なことは全て行政に任せ、個人個人は物質的な豊かさを求めて忙しく働き、難しいことは専門家に頼ればいい、そういう社会は、だがしかし、ここ20年くらいで限界が見えてきていた。だからこそ「NPO」や「ボランティア」といった活動に光があたるようになったのだし、地球環境への関心の高まりもその背景にある。何よりも昨年3月、東日本大震災による甚大な被害、しかもこれまで経験したことのなかった原発事故ということが、「行政」と「企業」、そして「専門家」に任せきりだった私たちの暮らしに、大きな疑問符を突きつけた、のだと思う。

では、どうしたらいいのか。もう江戸時代に戻ることはできない。私たちの暮らしには、政府も企業も不可欠な存在になっている。でもそれだけでは足りない。何が足りないのか？・・・ここで話を変えて、インドネシア・バリ島のある村で起きたことを紹介したい。

村人のイニシアティブを 引き出した公園職員たち

バリ島は美しいビーチや豊かな伝統文化で有名などころだが、多くの観光客が訪れる地域から西へ約150キロ、車で4時間ほど行ったところに「西部バリ国立公園」がある。この、面積約1万9,000ヘクタールの国立公園は、珊瑚礁やマングローブ林のある海辺から、標高1,000メートル級の山までを含む多様な生態系を育んでいる。175種の植物（うち14種が希少種）が確認され、7種の哺乳類、2種のは虫類、105種の鳥類、120種の魚類等、さまざまな動物が生息している。特にムクドリ的一种である「カンムリシロムク」はバリ島の固有種で、西部バリ国立公園内を生息地としている。

この国立公園の敷地に囲まれるような形で、ひとつの村がある。スンプルクランポック村というこの村は、もともとオランダ植民地時代にココナツのプランテーションとして切り開かれたところであった。インドネシア独立後、プランテーションを引き継いだ企業が採算をとれず撤退した後も、労働者として住み着いていた人々はそのまま残り、村を作ったという。その後バリ島最大の火山・アグン山噴火の際に逃れてきた避難

民が住みついたり、対岸のジャワ島から土地を求めて農民がやってきたりして、村の人口は増えていった。ところが1984年、この村の周辺にある森がほとんどすべて、国立公園として指定されてしまう。この地域の森にはバリ島内でも貴重な手つかずの自然が残っており、生物多様性保全の観点から、インドネシア政府はこの地域を国立公園として保護することを決めたのであった。

しかしながら、スンプルクランポック村の人たちにとっては、周辺の森は「生活のための森」であった。煮炊きに使う燃料となる薪や、家畜の餌となる草は森から取ってこなくてはならない。そして村の暮らしが少しずつ近代化するにつれ、現金収入も必要となり、村人たちは国立公園内の動植物の違法採取にも手を染めるようになる。特にバリ島固有種のカンムリシロムクはインドネシア国内外で高く売れるため、この鳥の密猟に関わる村人も出てきた。こうしたことから、スンプルクランポック村の人たちと、森の動植物を守ることを仕事とする公園職員たちはこれまで長い間、敵対的な関係となっていたのだ。

私たち「あいあいネット」が国立公園と周辺の村との「共存・協働関係構築」を目指して活動を開始したのは2008年だったが（注1）、この時に公園側から活動対象として指定されたのは、スンプルクランポック村ではなく、他の周辺2村であった。私たちが「公園区域に最も隣接しているスンプルクランポック村では活動しないのか？」と公園幹部に聞いても、「うーん、あの村は難しいからねえ・・・」という反応が返ってくるばかりであった。そこで私たちは他の村を対象として、公園現場職員がファシリテーターとして村に関わっていくための能力向上研修を行っていった。「何よりもまず、村人と対等なパートナーシップ関係を作ること」「村をしっかりと観察して事実を把握すること」「事実をもとに村の課題を分析し、『村にあるもの』を活用して課題解決の方法を考える」といったことを、ワークショップや現場での研修を通じて公園現場職員のチームに学んでもらっていった。

そうした中、2010年夏、転機が訪れる。当時の国立公園所長が「カンムリシロムクの人工繁殖を村人に広げられないか」という考えをもったのである。実は西部バリ国立公園では長年、日本の横浜市繁殖センターの協力を得て、カンムリシロムクの人工繁殖に取り組んできた。今後、野生に戻す「放鳥」を通じて個

体数を増やしていくためには、もともとの生息地に隣接しているスンプルクランポック村の村人にも協力してもらえばいいのでは、というのが所長のアイデアであった(注2)。彼はすぐに部下に「カンムリシロムク人工繁殖に関するセミナーを開催して、村人を集めよう」と指示を出そうとした。

ところがそれに対して、あいあいネットのプロジェクトチームメンバーである公園現場職員が、「待った」をかけた。「所長、そのやり方では、今までと同じですよ」「今までって?」「これまで国立公園では、村人に『木を植えましょう』と呼びかけて苗木を配ったり、『森を破壊しないで収入を増やすために畜産を振興しよう』と考えて子牛を配ったりしましたよね。その結果はどうでした?」「うーん、確かに、村人はもらうものはもらったけど、その後何も起こらなかったなあ」「そうですよ。だからカンムリシロムクの人工繁殖にしても、公園が呼びかけただけでは何も変わりません。まして相手は長年、私たちと敵対関係にあったスンプルクランポック村ですよ」「そうか・・・じゃあ、君たちに任せよう・・・こんなような会話がたぶん交わされたのであろう。あいあいネットのプロジェクトチームは、早速、スンプルクランポック村に足繁く通うようになり、まずは村人と友達になる、「パートナーシップ構築」から開始した。

国立公園職員の制服を脱いで、普通の格好で村を歩き、少しずつ、いろいろな村人と仲良くなっていった。村の歴史や昔の自然について村人に思い出してもらい、話をしていた。そんな中から、「うん、そういえば、昔はカンムリシロムクがこの村にもいっぱい飛び交っていたなあ。白くてかわいくて、それは綿毛のようじゃった」「牛で畑を耕していた時とか、カンムリシロムクが牛の背にちょこんと留まっていたなあ」「この村のあの木にはカンムリシロムクが巣を作ったりしていたよ」こういう話が村人の中から出てきた。そしてついに、プロジェクトチームのメンバーは村長さんから、「村にカンムリシロムクが戻ってくるという。そのために人工繁殖をやるものならやってみよう」という言葉を引き出すことができたのだ。

その後はほとんど拍子に村人の動きが生まれた。まず2010年11月、村人18名が参加して、村の集会所を会場に村の主催で国立公園が協力して人工繁殖の研修が開催された。研修後、村人たちは自主的にミーティングを開き、人工繁殖のグループ「Manuk Jegeg(美し

い鳥という意味のバリ語)」を結成することに。グループはカンムリシロムク保護協会から繁殖のための親鳥を借り受けるために必要な手続きを進め、民間による人工繁殖の許可を得るために自然資源保全事務所とも交渉し、ジャワ島の個人繁殖家を訪ねるツアーを執行して村のおばちゃんたちから学び、自分たちで飼育ケージを製作し・・・そしてついに2011年6月、30羽のカンムリシロムク親鳥がスンプルクランポック村にやってきて、バリ州知事臨席のもと、受け渡し式が行われた。その後、人工繁殖開始と平行して村人たちはカンムリシロムク生息地拡大に向けた取り組み(植樹の準備やカンムリシロムク保護のための村条例作り)を開始している。

外部者の役割とは ～「地域課題の解決」に向けて協働を引き出す～

バリ島・スンプルクランポック村の人々は、なぜカンムリシロムクの人工繁殖に積極的に取り組むようになったのだろうか。まず考えられるのはこの鳥がインドネシア国内で有名(日本におけるトキやコウノトリのような存在)であるので、「カンムリシロムクが飛び交う村」として、多くの観光客に来てもらいたい、という希望だ。それはある意味で「経済的な」動機と言える。けれども、スンプルクランポック村の成り立ちを聞いてみると、それだけが理由ではないことが分かる。実はこの村はもともと企業が切り開いたプランテーションだったことから、住民による土地の使用権が政府から正式に認められていない、という問題を抱えている。村人たちは長年にわたり、正規の村として政府から認証されるために努力してきたが、まだ正式な決定に至っていない(そうは言っても、公立小学校はあるし、村役場もあって公共事業も行われているのだが・・・)。だからインドネシアで人気のあるカンムリシロムクの生息地として大々的に売り出し、一般に認知されるようになれば、政府からも認められるのではないか、という思いが村にはあった。

あいあいネットのプロジェクトチームである国立公園現場職員たちによる、これまでと違った形での働きかけが、住民の主体的な動きを引き出すことに功を奏したのは間違いない。従来通りの「上から」「外から」の働きかけをしていたら、決して村人たちは自ら動くことはなかっただろう。ただここで興味深いのは、

チームによる「ファシリテーション」が村人の「琴線に触れた」ことだと思う。単に「カムリシロムクを売り物に儲けよう」という動機だけだったら、これほどまでに村人たちが盛り上がり共同して動くことはなかったのではないか。「カムリシロムクが飛び交っていた昔」を思い出し、「そんな村にしたいなあ」という思いを村人たちが共有し、しかもそれが「村の存在を政府に認めさせる」という長年の悲願につながるものであったからこそ、人々は積極的に動いたのだと思う。

それはまさに、「地域の課題の解決に向けて、住民たちが一丸となって取り組む」動きを、外部者である国立公園職員がファシリテートできた、ということの意味する。人々が共通して抱えている課題の解決にむけて、しかも「夢」を共有しながら、そこにあるものを活かし、協働して活動する。そういう住民の動きを創り出していくのが、外部者として村に関わるファシリテーターの役割なのだと思う。これは、「住民参加型の地域開発計画」が課題になりつつある他の国（たとえばあいあいネットが近年関わるようになったウガンダやベトナム）でも当てはまることだが、実は日本にも共通しているのではないかな。

昨年秋、あいあいネットがJICAから受託した研修事業の一環で、ウガンダからの行政官とともに神奈川県大和市と鎌倉市を、世界9カ国のNGOリーダーや行政官たちとともに川崎市を訪れ、各市役所の方々のお話を聞く機会があった。テーマは「NPOと行政との協働」。実は近年、「提案型協働事業」という制度が各地の自治体で導入されており、上記3つの市でも、NPOや市民グループが市役所と協働して課題の解決を目指す事業の提案を受け付け、市との協働事業として実施している。それぞれの市の状況や事業の内容はもちろん異なるのだが、担当の方が共通して強調されていた点がある。それは「地域課題の解決のために、もう行政だけが動く時代ではなくなった。地域に住む人々自身に積極的に動いてもらわないといけない」という問題意識である。どうもこれは日本全体で共通している状況のようで、私が教える大学院で学ぶ現役の区役所・市役所職員の方々も、授業で「もう役所だけでは住民が必要なサービスを全てカバーするのは無理」と異口同音におっしゃっている。「だからNPO等との協働は不可欠です」と。ところが、これも皆さん共通して指摘されるのは、「でも、NPOの側がなか

なか私たちの期待に応えてくれないのです」。

もちろん、NPOにはNPOの言い分がある。お役所の一方的な期待に応えて「下請け」的に「安価」で使われるのは不本意に違いない。ただ、NPOの側も「地域の本当の課題とは何か」「それを解決するために、何ができるのか」「その解決に向けて多くの住民を巻き込んでいくにはどうしたらいいのか」ということを、真剣に考えていくべき時が来ているのだと思う。そしてそれは日本でも、いわゆる途上国でも一緒ではないだろうか。

そこに住む人々が自分たちの課題解決のために、お互い助け合いながら、協力して活動していく。それが普通の暮らしに溶け込んでいくなら、もしかしてあの「時代小説に出てくる江戸庶民の暮らし」から感じる心地よさを取り戻すことができるかもしれない。そういう社会を作っていくことが、NPOやNGOの重要な役割なのだと思う。

注

- 1: 「西部バリ国立公園管理における地域コミュニティとの共存・協働関係構築プロジェクト」JICA 草の根技術協力プロジェクトとして2008年～2011年の約3年間活動。現在は2012年度から新しいフェーズのプロジェクト「自然と人間の共存を目指し、公園現場事務所を拠点とした、コミュニティ・国立公園協働活動促進手法の深化と普及」として準備中。
- 2: インドネシア政府は近年になり、絶滅危惧種であるカムリシロムクの民間による人工繁殖を許可する政策を展開している。既に西部バリ国立公園周辺以外の、ジャワ島やバリ島東部の村では人工繁殖に取り組む人々がでていく。

筆者プロフィール

長畑誠（ながはた・まこと） 1961年東京生まれ、横浜市在住。1988年～2002年までシャプラニール事務局職員。現在は、評議員。2004年に仲間とともに、世界の現場を結んで住民主体の地域づくりを促す「いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク（現一般社団法人あいあいネット）」を設立し、同会専務理事。また2011年から明治大学専門職大学院ガバナンス研究科教授としてNPO・NGO研究やコミュニティ人材マネジメント論等を担当している。

もうひとつの南の風 Vol.16 —シャプラニールのオピニオン誌—

発行人 : 中田豊一 編集長 : 筒井哲朗 担当: 石井大輔
発行 : 特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会
169-8611 東京都新宿区西早稲田 2-3-1 早稲田奉仕園内
TEL 03-3202-7863 E-mail edit@shaplaneer.org
Website <http://www.shaplaneer.org/>
発行日 : 2012年2月 頒価 : 300円(税込)
表紙版画: 福澤郁文 印刷 : シバプリント
